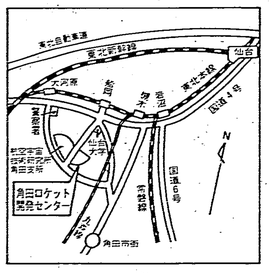
十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉔2222
©十勝毎日新聞社 1987

宇宙開発最前線

……3

宇宙開発事業団・角田ロケット開発センター



角田ロケット開発センター　宇宙開発事業団の試験研究施設の一つ。昭和五十三年十月に設置された角田ロケット開発室の機構が強化拡充されて、昭和五十五年七月に発足。ロケットのエンジン、燃料器に推進薬を供給するターボポンプ、推進薬タンク等の開発試験を行っている。

エンジン開発の核

騒音などトラブルなし

東北本線の船岡駅からタクシーで約十分。防衛庁第二団施設団船岡駐屯地を左手に見ながら、ちょっとした坂を上がって宮城県角田市にある宇宙開発事業団角田ロケット開発センターに到着した。取材当日は三日前に観測史上四番目の大雪が降ったばかりで、金属のタンクなどが見えたものの、あたり一面は雪にすっぽり覆われていた。足を一歩踏み入れるとまず、敷地の広さに目を奪われた。

☆防災には万全の備え

同センターの敷地は約八十三ヘクタール。「ロケットの実用化の試験には安全性の面でやはりこれだけの土地が必要。三カ所ある火気を使う施設には万が一に備え、半径三百六十㍍の所にフェンスを張っています。そのほか、騒音、水質汚染など公害には気をつけていきます。住民の方に理解していただくのが一番大切ですから」と、高橋経治所長が穏やかな口調で説明する。

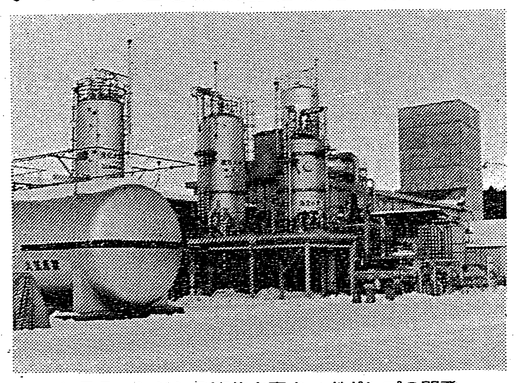
高橋経治所長

角田ロケット開発センターは、昨年八月に打ち上げられたH－Iロケット第二段の液体酸素、液体水素エンジンLE－5の最終試験を行うなど、日本のロケットエンジン開発の中心的役割を担っている施設。仙台市の南方約三十㌔、角田市の北はずれの丘陵地に位置し、反対側には主にロケット開発の基礎研究を行っている航空宇宙研究所角田支所もある。

ここの主な施設は三カ所。まず最初に案内されたのが、真空など宇宙環境と同じ条件で燃料タンクのシステムのテストを行うタンク熱特性試験設備。内径六㍍、高さ約十五㍍の熱真空槽がそびえ立つ。この中にタンクを入れ実験、内部にはランプ、冷却板（クライオパネル）などが取り付けられている。

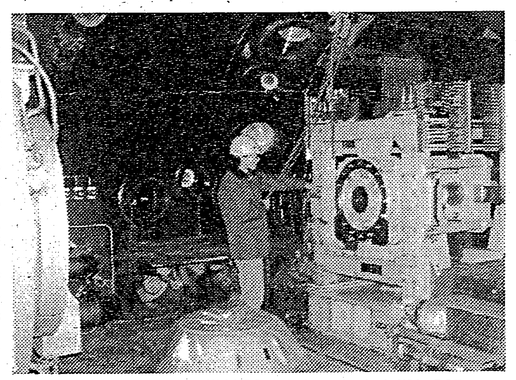
次いで高空環境を模擬した状態でエンジン燃焼試験を行う高空燃焼試験設備。最後に液体酸素、液体水素を燃焼器へ供給する液体水素ターボポンプなどの試験を行う供給系総合試験設備を見学。今度ここでHIIロケットの第一段エンジン、LE－7の液体ポンプの試験を行っていく－という。

これらの施設をバスで回ったが、各施設とも自然の土手をうまく防壁に使っており、やキツネもよく遊びに来る」と案内してくれた名倉勝夫管理係長。ロケットの試験を行うためのさまざまな最先端設備と自然がうまく共存している印象を強く受けた。


LE7エンジンの液体水素ターボポンプの開発試験を行っていく供給系試験設備

☆手を挙げていれば有利

高橋所長の言葉通り、排気設備やトンネルのような消音筒が完備されていた。また移動中、バスの窓からは貯水池に遊ぶキジの姿も見え「タヌキ


LE5エンジンの燃焼試験を行った高空燃焼試験設備の試験棟低圧室

「やはり近い将来、宇宙ステーションの時代が来る。その際、日本の宇宙基地としては、滑走路だけでも六千㍍は欲しい。それといつも使える場所。サポートとしての施設も作れるかどうかも問題。何年先かわからないが、手を挙げていれば、有利なことにはまちがいないでしょう」と答えてくれた。

このあと、開発センターとは車で約三十分離れた角田市役所を訪れた。角田市は稲作中心の農業を基盤とする田園都市で人口は約三万五千五百人。ロケット開発センターの場所は戦事中は海軍火薬廠（しょう）のあった所で、跡地利用の目的で誘致。昭和五十五年七月開設されたが「開設の時も現在も騒音などのトラブルはほとんどない」（同市役所）という。

開発センターの職員十八人（うち三人は地元採用）の宿舎は角田市にあるが、試験日ともなると百人近くに膨れ上がるメーカーなどの関係者、年間約六千人の見学者は船岡駅のある隣町の柴田町を利用している。「見学者の民宿利用などの面ではあまり期待はできませんが、ロケット開発の中心的役割を果たす市として、街のイメージアップづくりに役立てようーと二年前に発足した観光協会とタイアップして力を入れています。ポスターを東京を中心に配布するなどしています」と市担当者。角田市勢要覧に「明日の宇宙を拓（ひら）くまち」として開発センターと同研究所角田支所を大きく紹介しているのが目を引いた。

自然と最先端設備が共存。小さな街がロケット開発の中心的都市になっている。十勝も宇宙基地の中心的役割を果たせれば、と思いながら角田市を離れた。

（近藤　政晴記者）

（つづく）

年間キャンペーン　目指せ宇宙基地・第一部